

オーケストラ・アンサンブル金沢

2020年

5月

定期公演

Orchestra Ensemble Kanazawa
Subscription Concert in May 2020

当公演は新型コロナウイルス感染症
拡大防止の為、中止となりました。





オーケストラ・アンサンブル金沢

Orchestra Ensemble Kanazawa

1988年、岩城宏之が創設音楽監督(永久名誉音楽監督)を務め、多くの外国人を含む40名からなる日本最初のプロの室内オーケストラとして石川県と金沢市が設立。JR金沢駅兼六園口に建つ石川県立音楽堂を本拠地とし、北陸、東京、大阪、名古屋での定期公演など年間約100公演を行っている。シュレスヴィヒ=ホルシュタイン音楽祭への4度の招聘など、これまで20回の海外公演を実施。設立時よりコンポーザー・イン・レジデンス(現コンポーザー・オブ・ザ・イヤー)制を実施、多くの委嘱作品を初演、CD化している。ジュニアの指導、学生との共演、邦楽との共同制作などオーケストラ育成・普及活動にも積極的に取り組んでいる。ドイツ・グラモフォン、ワーナーミュージック・ジャパン、エイベックス・クラシックスなどメジャーレーベルより90枚を超えるCDを発売。2007年より井上道義が音楽監督(～2018年3月末)を務め、18年9月よりマルク・ミンコフスキが芸術監督を務める。


オフィシャル・サイト <http://www.oek.jp/>

Orchestra Ensemble Kanazawa is one of the most active chamber orchestra in Japan, founded in 1988 by the initiative of renowned conductor Hiroyuki Iwaki, and based in Kanazawa symbolizing Japanese art, culture and tradition. OEK has over 100 concerts a year in all major cities through out Japan, and regularly performs abroad. Although programme building is based on classical repertoire, great emphasis is put on interpretation of contemporary music. Over 90 CDs are released from Japanese major label. Michiyoshi Inoue was engaged as the Music Director of the OEK in 2007 (～March 2018). In September 2018, Marc Minkowski became the Artistic Chef.

Official site ; <http://www.oek.jp/>

コンポーザー・オブ・ザ・イヤー(2009年までコンポーザー・イン・レジデンス)

一柳 慧 (1988～1991)	藤家溪子 (1998～1999)	間宮芳生 (2005～2006)	権代敦彦 (2014～2015)
石井真木 (1988～1991 2003 4月†)	林 光 (1999～2000 2012 1月†)	新実徳英 (2006～2007)	一柳 慧 (2015～2016)
外山雄三 (1991～1992)	江村哲二 (2000～2001 2007 6月†)	一柳 慧 (2007～2008)	ティエリー・エスケシュ (2016～2017)
西村 朗 (1992～1993)	松村禎三 (2001～2002 2007 8月†)	三枝成彰 (2008～2009)	池辺晋一郎 (2017～2018)
湯浅譲二 (1993～1995)	三善 晃 (2002～2003 2013 10月†)	ロジェ・ブトリー (2009～2010 2019 9月†)	扶間美帆 (2018～2019)
武満 徹 (1995～1996 2月†)	猿谷紀郎 (2003～2004)	加古 隆 (2010～2011)	酒井健治 (2019～2020)
黛 敏郎 (1996～1997 4月†)	権代敦彦 (2004～2005)	望月 京 (2011～2012)	
池辺晋一郎 (1997～1998)	レーラ・アウエルバッハ (2004～2005)	陳 銀淑 (2012～2014)	



第429回 定期公演 マイスター・シリーズ

2020年5月23日(土) 14:00開演 石川県立音楽堂コンサートホール



The 429th Subscription Concert / Meister-Serie

Saturday, 23 May 2020 at 2PM / Ishikawa Ongakudo Concert Hall

ピアノ弾き振り ● アンジェラ・ヒューイト

Conductor & Piano Angela Hewitt

主催：公益財団法人 石川県音楽文化振興事業団

助成：  文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
 独立行政法人 日本芸術文化振興会


beyond
2020



J.S.バッハ

Johann Sebastian Bach

ピアノ協奏曲

Piano Concerto

第3番 二長調 BWV1054 No.3 in D major , BWV1054

第5番 ヘ短調 BWV1056 No.5 in F minor , BWV1056

第7番 ト短調 BWV1058 No.7 in G minor , BWV1058

休憩 / Intermission

第2番 ホ長調 BWV1053 No.2 in E major , BWV1053

第1番 二短調 BWV1052 No.1 in D minor , BWV1054

5
23

ピアノ弾き振り

アンジェラ・ヒューイット

Conductor & Piano

Angela Hewitt

世界で最も高く評価されているピアニストの一人。幅広いレパートリーを持ち、世界各地にてリサイタルや主要オーケストラとの共演を重ね、とりわけバッハの演奏と解釈においては比類なき評価を集める。

音楽一家に生まれたヒューイットは、3歳でピアノを始め、4歳で聴衆を前に演奏し、5歳で最初の奨学金を得た。オタワ大学にてジャン＝ポール・セヴィラに師事。1985年のトロント国際バッハ・ピアノ・コンクールで優勝して、一躍世界の注目を集める。2005年イタリアのウンブリアにて、自らが芸術監督を務めるトラジメーノ音楽祭を創設。

近年の活動のハイライトとしては、2016年に向こう4年間でバッハの鍵盤音楽の全てを演奏する「バッハ・オデッセイ (Bach Odyssey)」プロジェクトを発表。ロンドン、ニューヨーク、オタワ、東京、



Angela Hewitt occupies a unique position among today's leading pianists. With a wide-ranging repertoire and frequent appearances in recital and with major orchestras throughout Europe, the Americas and Asia, she is also an award-winning recording artist whose performances of Bach have established her as one of the composer's foremost interpreters.

In September 2016, Hewitt began her "Bach Odyssey", performing the complete keyboard works of Bach in a series of 12 recitals in London, New York, Ottawa, Tokyo and Florence.

Recent highlights include her debut at Vienna's Musikverein, the Cartagena Festival in Colombia, a residency at Harvard University, and Beethoven with the Xi'an Symphony in China.

Hewitt's award-winning cycle for Hyperion Records of all the major keyboard works of Bach has been described as "one of the record glories of our age" (*The Sunday Times*). Her

フィレンツェの各都市で、各々 12回公演の演奏を行なっている。2019年にはウィーン楽友協会ヘデビュー。またコロンビアのカルタヘナ音楽祭への出演や西安交響楽団と共演を行うほか、ハーヴァード大学のレジデンス・アーティストを務めた。

ハイペリオン・レーベルにて録音したバッハの鍵盤楽器作品集は、数々の賞を受賞し、「現代レコード界における栄光のひとつ」(ザ・サンデー・タイムズ)と評された。その他にもクープラン、ラモー、モーツァルト、ベートーヴェン、シヨパン、シューマン、リスト、フォーレ、ドビュッシー、シャブリエ、ラヴェル、メシアン、グラナドスなど数多くの傑出した録音を行なっており、2015年にはグラモフォン・ホール・オブ・フェーム(グラモフォン栄誉の殿堂)入りを果たした。

2006年女王誕生記念大英帝国勲章(オフィサー)、2015年にはカナダ最高位の勲章(コンパニオン)を受勲。2018年カナダ総督が授与する舞台芸術生涯功労賞を受賞。2020年、ライプツィヒ市から、バッハの研究、演奏で功績をあげた音楽家に授与される「バッハ・メダル」を女性として初めて受賞。カナダの王立協会会員。7つの名誉博士号を持ち、ケンブリッジ大学ピーターハウス・カレッジの客員研究員を務める。

discography also includes albums of Couperin, Rameau, Mozart, Beethoven, Chopin, Schumann, Liszt, Fauré, Debussy, Chabrier, Ravel, Messiaen and Granados. In 2015 she was inducted into *Gramophone Magazine's* “Hall of Fame” thanks to her popularity with music lovers around the world.

Born into a musical family, Hewitt began her piano studies aged three, performing in public at four and a year later winning her first scholarship. She studied with Jean-Paul Sévilla at the University of Ottawa, and won the 1985 Toronto International Bach Piano Competition which launched her career. In 2018 Angela received the Governor General's Lifetime Achievement Award, and in 2015 she received the highest honour from her native country – becoming a Companion of the Order of Canada. In 2006 she was awarded an OBE from Queen Elizabeth II. She is a member of the Royal Society of Canada, has seven honorary doctorates, and is a Visiting Fellow of Peterhouse College in Cambridge. She founded the Transimeno Music Festival (Umbria, Italy) in 2005.

She will become the first woman to receive the Bach Medal from the city of Leipzig in 2020, which is awarded to musicians who have significant achievements in the study and performance of Bach.

今回はドイツが生んだ大作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685–1750) のピアノ協奏曲の特集である。といってもこれらはもともとピアノのために書かれたものではない。バッハが生きた18世紀前半においてはピアノという楽器は誕生して間もない時期で未発達の状態にあり、当時の鍵盤楽器の主流はチェンバロだった。つまりこれらは本来チェンバロ協奏曲として書かれたものなのだが、チェンバロは19世紀には廃れてしまったことで、20世紀半ばにチェンバロが復活するまでピアノ協奏曲として演奏されることになり、今日でもピアノで演奏される機会は少なくない。ただ本来はチェンバロ協奏曲なので、以下チェンバロ協奏曲として解説していく。

さて音楽史においてバッハがバロック時代の最後期の作曲家として位置付けられることは、改めて言うまでもないだろう。バロック音楽は17世紀以来、多様な展開を見せ、様々な様式と曲種を発展させたが、バッハは若い時期からそうした様々な様式の研究を怠らず、先人たちの業績を貪欲なまでに吸収していった。しかも彼は決してそれら既存の様式なり手法なりをただ受け継いだけではない。彼の偉大さは、バロックの諸様式をさらに深く追求することでそこに新しいものをもたらして、バロック音楽の最後の高みを築いた点にあった。

そのことは協奏曲のジャンルにおいても当てはまる。バッハは若い時期から先輩のヴィヴァルディの協奏曲を鍵盤楽曲に編曲したりして、協奏曲の原理を学び取り、それを基礎に自らの書法を多角的に追求していった。こうして、特にケーテンの宮廷に務めていた時期から後半生のライプツィヒ時代にかけて、いくつもの協奏曲の傑作を書いている。一連のチェンバロ協奏曲はそのライプツィヒ時代に生み出されている。

バッハは後半生にライプツィヒの聖トーマス教会のカントル (合唱長) として教会音楽を多

数作り出したが、その傍らで学生を中心とするコレギウム・ムジクムという合奏団の指揮者も務め、冬季にはコーヒー店で、夏季には郊外の庭園で毎週のように演奏会を催した。彼のチェンバロ協奏曲はこの合奏団で演奏するために書かれたものだった。これらのチェンバロ協奏曲で興味深いことは、そのほとんどが以前に別の楽器（ヴァイオリンや管楽器など）のために書いた協奏曲をチェンバロ用に編曲したものである点だ。それは彼が多忙だったこともあるが、それ以上に、この時代はまだチェンバロ協奏曲というジャンル自体が新しいものだったことと関わっている。バッハは同時代の様々な様式の楽曲を他の形態に編曲したり転用したりして、新たな様式的な可能性を追求するということをよく行なったが、チェンバロ協奏曲という当時新しいジャンルを開拓するにあたって、他の楽器用に書いた協奏曲を書き換えることでその書法を探ったわけである。

様式の点では当時の独奏協奏曲の形に則ったもので、急緩急の3楽章構成を成し、急の両端楽章はリトルネッロ形式（合奏の総奏部分が、独奏を中心とする部分を挟んで何度か回帰する形式）をとり、緩の中間楽章では独奏のカウンタービレが生かされる。しかしその中でも対位法や展開的書法などに工夫を凝らして、協奏曲の新たな可能性を掘り下げている点がバッハらしい。

J.S.バッハ ピアノ協奏曲

第3番 二長調 BWV1054

この曲の原曲はヴァイオリン協奏曲第2番ホ長調BWV1042である。このヴァイオリン協奏曲は、バッハがケーテンの宮廷楽長を務めていた1720年前後、ここの宮廷楽団の優れた首席ヴァイオリン奏者シュピースのために書かれたものと推定されてきたが、最近では、ライブツィ

ヒ時代の1730年前後にコレギウム・ムジクムのために書かれたとする説が出されている。後者の説に従うなら原曲が書かれてからそれほど間を置かない時期にチェンバロ用に編曲されたと考えられよう。緊密な動機の扱いや対位法手法が生かされた作品で、特に明朗さに満ちた冒頭のアレグロ楽章ではリトルネッロ形式とダ・カーポ形式（ABA形式）を結び合わせ、しかも中間部ではのちのソナタ形式を先取りするような主部主題の展開が行なわれているのが注目される。ロ短調の中間楽章は内省的な深い情調を湛えたアダージョ楽章。生气に満ちた舞曲風の主題を持つ明るいアレグロ・アッサイのフィナーレでは、リトルネッロ形式の特質がフランスのロンドー的な形式と結び付けられている。

第5番 ヘ短調 BWV1056

この第5番の原曲は今日失われているが、おそらく両端楽章はバッハが若い時期（ヴァイマル時代？）に書いたヴァイオリン協奏曲ト短調に基づくと推測されている。一方で中間の第2楽章はもともとオーボエ協奏曲ニ短調の緩徐楽章（ヘ長調）だった曲の編曲ではないかと考えられている。いずれにしても原曲が消失しているので推測の域を出ないが、この第2楽章は1729年頃のカンタータBWV156の第1曲に取り入れられており、その後このチェンバロ協奏曲第5番のために編曲されたようだ。第1楽章は力強い素朴な性格を持つ。ラルゴの第2楽章ではピッツィカート伴奏上で独奏が美しい旋律を奏する。最後はプレストの活力溢れるフィナーレで締めくくられる。

第7番 ト短調 BWV1058

原曲はヴァイオリン協奏曲第1番イ短調BWV1041。この原曲は、第3番ニ長調の項で触れたヴァイオリン協奏曲第2番同様、ケーテン時代の1720年頃に書かれたとされてきたが、近年の研究ではライプツィヒ時代になってからの作とする見方もされている。いずれにしても原曲の引き締まった造型が編曲版のチェンバロ協奏曲にも生かされている。第1楽章は緊密な作り

によった力感溢れる楽章。第2楽章は伴奏の特徴的な音型の上で独奏が装飾的な旋律を歌う変ロ長調のアンダンテ。フィナーレはアレグロ・アッサイ、舞曲ジークを思わせる躍動的なリズムのうちに密度の高い発展が繰り上げられる。

第2番 ホ長調 BWV1053

この作品の原曲は現存しないが、もとは変ホ長調のオーボエ協奏曲だったとする見方が有力だ(フルート協奏曲へ長調という説も出されている)。チェンバロ協奏曲に編曲する以前に、バッハはオルガン協奏曲にも編曲し、さらに最初の2つの楽章をカンタータBWV169の第1、5曲に、終楽章をカンタータBWV49の第1曲に転用している。第1楽章は快活な冒頭楽章で、第3番ニ長調の第1楽章と同様、ダ・カーポ形式とリトルネッロ形式を結び付けている。続く嬰ハ短調のシチリアーノ楽章では細かい音の動きに彩られた旋律を独奏が奏でていく。アレグロのフィナーレは賑々しい華やかなもので、第1楽章と同じくダ・カーポ形式とリトルネッロ形式が重ね合わせられている。

第1番 二短調 BWV1052

この作品も原曲が今日失われているが、ヴァイオリン協奏曲が原曲だろうと推測されており、第2番同様に、チェンバロ協奏曲に編曲される以前にオルガン協奏曲に編曲され、さらに第1、2楽章がカンタータBWV146の第1、2曲に、第3楽章がカンタータBWV188の第1曲にそれぞれ編曲・転用されている。バッハの協奏曲の中でも特にスケールの大きい作品だ。アレグロの第1楽章は冒頭に出るユニゾンの主題が楽章全体の厳粛な性格を決定付ける一方、独奏の自由な発展が音楽に大きな広がりを与えている。ト短調のアダージョ楽章では低音の悲劇的な重々しい歩みの上で憂いを含んだ旋律が歌われる。最後はエネルギッシュな主題を中心に運ばれるアレグロのフィナーレで閉じられる。